

随筆

ドイツ・スペイン駐在記

飯田 亮

1. はじめに

私は、2018年4月からドイツのミュンヘンに、そして、2019年4月から2024年8月までスペインのパンプローナに営業として駐在した。

ドイツではKEU (KYB Europe GmbH.) ミュンヘン支店(当時)の立ち上げに参画し、パンプローナではKEU (KYB Europe GmbH.) ナバラ支店にて、現地のローカル営業員と業務にあたった。

この6年半という駐在生活はCOVID-19が猛威を振るった時期と重なっており、このCOVID-19という新型感染症の突然の出現により、駐在活动に大きな影響がもたらされた。

COVID-19は、良くも悪くも公私ともに大きな変化をもたらしたので、COVID-19の前後を比較する形でも、駐在生活を紹介し、この未曾有の経験も、お伝えすることが出来たら幸いである。

2. ドイツ駐在

2.1 街の紹介

ミュンヘンはドイツの南に位置する都市である。

ミュンヘンには、日本人が4000人以上在住しており、日本企業(無印良品、日本食材店)はもとより、他国企業も多く進出しているため、生活には困らなかった。

基本的に治安は良いが、観光客が多い場所、夜遅くや、人気のない道、ハウプトバンホフ(中央駅)のような大きな駅とその周辺、駅裏などは注意が必要である。これはヨーロッパ諸国のどの国でも気を付ける必要がある。

街の中にバス、トラム、地下鉄、鉄道が縦横無尽に走っており、車に乗らずとも事足りる。嬉しいことに6歳以下の子どもは無料である。

ミュンヘンには、オクトーバーフェストというビールの祭りがあり、500万人以上の人を訪れ、大きなジョッキのビールを楽しむ姿が有名である(写真1)。

気候は日本のように四季がある。緯度が高いため、夏は涼しく冬は寒いイメージであるが、昨今の地球温暖化の影響もあり、夏はとても暑く、一方で、私が駐在した2018年の冬は数年に一度の大寒波であった。



写真1 オクトーバーフェスト会場と伝統衣装を着る息子

2.2 業務

ドイツでの業務はミュンヘン支店(当時)を立ち上げるところから始まった。その当時のKEU (KYB Europe GmbH.) の本社はデュッセルドルフにあり、駐在生活もまずはデュッセルドルフから始まった。

そして毎週ミュンヘンに出張し、生活の基盤を整えることが1番の業務となっていた。ミュンヘンでは土地勘もなく、知り合い等もいないため家探しに苦労したのを覚えている。

最初のオフィス自体は、レンタルオフィスであった。オフィス探しは苦労なく進み、赴任直後の4月には鍵を受け取り入居することができた。4人部屋の非常に狭いオフィスだったが、日当たりもよく快適な空間であった(写真2)。

その後のミュンヘンでの業務は従業員を雇用することであり、取り急ぎは日本語を話せるドイツ人が必要であった。英語普及率が高いミュンヘンだが、やはりビザの申請や銀行口座開設等には、ドイツ語が不可欠であった。デュッセルドルフ本社で面接を

数人実施し、希望に沿った人物を雇用することができた。その後ドイツ人設計者も雇用し、ドイツ人2人と駐在員2人の4人体制でKEU (KYB Europe GmbH.) ミュンヘン支店が稼働を始めた。



写真2 初代ミュンヘン支店内

私の営業としての業務は、営業企画である。

ローカル営業員はスペインのKEU (KYB Europe GmbH.) ナバラ支店にいるため、スペインへ定期的に出張していた。また製造拠点はKEU (KYB Europe GmbH.) ナバラ支店のあるKYBSE (KYB Suspensions Europe, S.A.U) と、同じくスペインにあるKAMS (KYB Advanced Manufacturing Spain, S.A.U.), そしてチェコにあるKMCZ (KYB Manufacturing Czech, s.r.o.) があるため、基本的にはスペインかチェコに出張しており、ミュンヘンにいることは少なかった。

ミュンヘン空港は欧州内移動に非常に便利で、スペインのパンプローナ空港へは、ドイツのフランクフルト空港か、スペインのマドリード空港経由となり、必ず2度飛行機に乗る必要があった。

パンプローナから北に車で2時間弱のところにあるビルバオ空港には、ミュンヘンから直行便があるため、2度のフライトでパンプローナ空港まで行くか、1度のフライトと2時間弱の車移動でパンプローナまで行くかの選択肢があった。

赴任当初は、飛行機に乗ることを楽しいとも感じていたので、フランクフルト空港経由でパンプローナ空港まで行っていた。

一方、チェコのKMCZ (KYB Manufacturing Czech, s.r.o.) に行くには、ミュンヘン空港から1時間弱のフライトでチェコのプラハ空港までは行ける

が、KMCZ (KYB Manufacturing Czech, s.r.o.) のあるパルドゥビツェに行くには、プラハ空港から1時間半の車移動が必要であった。

飛行機を待つ時間や保安検査の面倒を考えると、ミュンヘンから直接パルドゥビツェまで車移動したほうが楽なことに気づいてからは、500km/5時間の車移動を行っていた。

また欧州内飛行機は基本的に遅れる。朝1番の便はまだ良いが、午後過ぎからの便は遅れないほうが珍しい。

結果乗り継ぎができずに、しばしば、目的地にたどり着けないこともあれば、着陸予定空港の天候が悪く、別の空港に着陸することもあった。

このようなアクシデント時は、航空会社が次の日のチケットや、宿泊チケットをくれるので、予想外の国や街に泊まることになる。

この状況をピンチと感じるか、自身の経験値アップと思い楽しめるかも、駐在生活を送るにあたって、ストレスを少なく過ごすための大切な思考傾向なのではないかと思う。

2.3 生活

2.3.1 日々の暮らし

初めての海外赴任、更に家族帯同（当時子どもは3歳）ということで、家探しの時に、子どもの教育環境や、妻子の生活のための交通の利便性も考慮した。

街にはIKEAが2つあり、パーツを買って自分でキッチンを作るなどドイツ人のDIY精神には感服するものがあった。

その様なドイツ人気質から、家を整えるときもかなりDIYが必要だった。我が家の室内灯も自分で繋ぐことになった時はなかなか骨が折れた。よく感電、火災にならなかったものだと思う。

ドイツの家には、基本クーラーは付いていないため夏の時期は地球温暖化の影響もあり、非常に暑かった。

一方、冬の時期は、住居防寒対策はしっかりできており、セントラルヒーティングで非常に快適に過ごせた。

家の中は暖かいが、かなりの降雪量なので、ベランダで大きな雪だるまを作ったり、我が家もそりを買って、そり遊びをした。また、子どもは幼稚園にそりで通うこともあった。

スーパーやドラッグストアも充実していた。基本的に日曜日は休日にあたり、商業施設は定休日である。パン屋、ガソリンスタンド、個人商店は開いており、ガソリンスタンドには小さなスーパーが併設されているので、日曜日でもちょっとした日用品は買えた。

日本人医師が経営する病院もあり、日本語で診療を受けられる。ただし処方箋はアポテケといういわゆる調剤薬局に持っていくのだが、ドイツ語で対応される。大都市ということもあり、観光地や若い店員には英語が通じることもあるが、基本はドイツ語である。

ガソリンはセルフスタンドである。ドイツの洗車は、自動で流れていく車の横の通路を徒歩でついていくという面白いスタイルなので、小さなお子さんがあるご家庭はぜひ洗車を体験してほしい。

食事に関しては、ドイツ料理はもとより、様々な国の料理が、その国のそのままの味で楽しめる。特にトルコ移民が多いため、ケバブは絶品である。オクトーバーフェストの会場公園近くのケバブ屋は毎週通うほどおいしかった。

ドイツパンやドイツ流ポテトサラダ、ソーセージ、乳製品、魚の燻製の美味しさは、帰任した今でも、家族で懐かしむドイツの味である。

冬の時期は日没が早く、街も気分もどんよりとした雰囲気になるが、クリスマスに向けて街は賑わいを見せていく。そんな冬の楽しみは、何といてもクリスマスマルクト（クリスマスマーケット）である。

ミュンヘン市内だけでも、大小合わせて20以上はあったのではないだろうか（写真3）。

寒い冬にグリューワイン（ホットワイン）を飲んで体を温めるのが、クリスマスマルクトの楽しみ方であるが、クリスマスマルクトごとにグリューワインのコップデザインが異なっており、それを収集するのも楽しみとなっていた。



写真3 クリスマスマルクト開催中のミュンヘン

クリスマスマルクトは、ミュンヘン以外の街でも開催されているので、他の街を訪れてクリスマスマルクトを楽しむのも楽しかった。

2.3.2 旅行

ミュンヘンは、ドイツの南に位置しているので、オーストリア、スイス、リヒテンシュタイン、チェコなどは陸路で気軽に旅行ができ楽しかった。

夏のツークシュピッツェ山のふもとのガルミッシュ＝パルテンキルヘンや、冬のチェコのチェスキークルムロフなどは、日本では見ることでできない美しい景色が心に残っている。

また、ドイツ北部地方は南部とは雰囲気が違い、特にベルリンは共産主義のにおいの残る、少しほの暗い非常に興味深い街であった。

また、遠くまで行かなくても、近所の農園や公園でのピクニックもとても楽しかった（写真4）。

都市間の移動、郊外へのアクセスはアウトバーン（高速道路）が便利である。SAの数は比較的多く、どこも綺麗だった。トイレは有料で、小銭しか使えないところが多いので注意が必要である。

国境では検問、パスポートコントロールがあるところもあるので、身分証明書の携帯を忘れないようにしないといけない。

料金は無料であるが、国境を越えると、突然有料区間が始まることもあるので注意が必要である。スイスは、車検シールのような通行シールを購入し、フロントガラスに貼るのだが、調べるとスイス国内で購入とあり、特に検問もなく越境してしまったため、国境を越えた次のSAで購入できるまで無銭走行になり、無事購入できるか緊張したことを覚えて



写真4 ノイシュバンシュタイン城

いる。

今思うと、きっと手前のドイツ側でも購入できたのではないかと思う。2024年現在はオンラインで購入が可能とのことである。

3. スペイン駐在

3.1 街の紹介

パンプローナはスペイン北部に位置する街である。

歴史は古く、味わいのある街ではあるが、人口20万人ほどの街の規模で、日本人は20人もいないのではないかと思われる。

パンプローナには、スペイン3大祭りの一つであり、通称「牛追い祭り」と呼ばれる、サンフェルミン祭という盛大かつ勇壮なお祭りがある。

ヘミングウェイの小説にも登場したお祭りで、サンフェルミン祭の間は街中がお祭り一色になる（写真5、6）。

小さい街であるため、最初はミュンヘンと比べて生活しにくいと感じた。しかし、必要なものは揃うため、コンパクトに生活できるという点では良かった。

スペインも日曜日は店舗が閉まる。さらに個人経営の店舗はシエスタで14時～17時頃まで閉まっているところが多くある。

市街地内であれば徒歩や、バス移動で日々の生活は困らないが、マクドナルドやショッピングモール、大型店舗は郊外にあるため車が必須である。アウトピスタ（高速道路）は有料で、SAがない区間が多い。通年を通して温暖な気候で、私が住む愛知県によく似た気候だった。しかし、こちらも地球温暖化の影響か、サハラ砂漠からの熱波で気温が上昇し、場所によっては死者が出るほどの、とても暑い夏であった。雪も、一冬に一度ぐらい降る。住まいの窓から道路に設置されている温度計が見えたため、出社前によく気温のチェックをしていたが、朝晩の寒暖差が激しいため服装に悩むことが度々あった。また、緯度が高いため、夏は22時過ぎまで明るく、冬は日が短かった。1週間続く牛追い祭りの花火は、日の入り後の23時開始という日本では考えられない遅い時間だった。私の家は、打ち上げ会場のすぐ横で、とてもよく見えたが、連日の23時過ぎの爆音はなかなか辛いものだった。スペインは、ドイツほどクリスマス感はないが、いわゆる12月25日のクリスマスと、もう1つ、公現祭（東方の3博士がキリストを訪れたことを祝う日）の1月6日も祝う。

子どもたちは2回プレゼントがもらえるので喜んでいる。この時期、どこのパン屋、スーパーでもロスコンデレジェスというクリスマスの時期に食べるパンのようなケーキがある（写真7）。これは中に

陶器の小さな人形や豆が入っていて、切り分けた時にそれが当たった人は1年良いことがあるというおみくじのようなものである。

私は、オフィスで食べたロスコンデレジェスで当



写真5 サンフェルミンでの正装



写真6 サンフェルミン中のパンプローナ



写真7 ロスコンデレジェス

たったことがある。実は当たった人が、その次の年のロスコンデレジェスを買うそうなのだが、次の年のクリスマスに、スペインに居なかった私の代わりに誰が買ってくれただろうか。

3.2 業務

2019年4月からKEU (KYB Europe GmbH.) ナバラ支店に異動し、ローカル営業員と同オフィスで働いた。ミュンヘンに居るときからコミュニケーションは取れていたが、やはり近くにいた方が働きやすきはあった。

またスペインへの出張はなくなったが、チェコへは遠くなり、KMCZ (KYB Manufacturing Czech, s.r.o) に行くだけでも1日が終わってしまうほどであった。

社内・社外関係なく、どこに出張に行くにも飛行機に乗っていたので、かなりの回数飛行機に乗る機会があった。

スペインは勤務時間帯が他の国と大きく異なっていた。昼食が13時から15時ぐらいの間に1時間取るようになっており、いわゆる社員食堂がなかったため、人によっては家に食べに帰っていた。駐在員は近くに提携レストラン「ドン・ハビエル」があり、そこで昼食を取っていた。KYBSEのあるオロロピア村は小さい村であり、レストランも非常に少ない(写真8)。

前菜・メイン・デザート・コーヒーとなかなかのボリュームを昼から食べることができたが、日々のメニューのパターンは少なかった。前菜には皿大盛りの野菜サラダ、メインは牛や豚、鶏、魚を焼いたものだった。デザートにはスペイン北部発祥のクアハダという山羊のミルクで作ったヨーグルトをよく食べていた。レストランで使用するスペイン語のほとんどはこの「ドン・ハビエル」で学んだ。

COVID-19前後で業務の仕方も大きく変わった。COVID-19が猛威を振るっていた時期は、工場もオフィスも閉鎖され、在宅勤務のみとなった。

COVID-19が落ち着いた後も在宅勤務制度は残り、午前中は出勤、午後は在宅とするローカル従業員が多かった。

会社で顔を合わせる機会は減ったが、一方でTeamsのようなオンライン会議が急激に整備されたおかげで、どこにいても働けるような環境が整った。

ちょっとした内容の会議ならば、わざわざ飛行機に乗って国外に出張しなくとも、Teams会議で済むことも多いため、その点では時間的余裕もでき、働きやすくなったと言えるだろう。



写真8 KYBSEのあるオロロピア村の教会

3.3 生活

3.3.1 COVID-19以前 日々の暮らし(家族帯同)

子どもは、日本人学校がなかったため、現地幼稚

園で、全てスペイン語での生活でのスタートになった。

全くスペイン語がしゃべれなかったが、入園前にひたすら見たスペイン語の幼児番組で単語を覚え、1日8時間スペイン語に触れることで、入園して1カ月経つ頃には、先生の言葉を理解し、アミーゴ(友達)ができていたようだ。子どもの適応能力には驚かされた。

私の仕事の性質上、欧州内出張が多く、妻と子どもは二人きりで過ごすことも多かった。

市街地ならバスと徒歩で全て行くことができ、ちょうど同じ時期の駐在家族で、同じ年頃の子どものいる他駐在家族とも交流があり、母子ともに楽しく過ごしていたようだ。国を跨いだ2回の引越し、慣れない土地での生活については、妻にも子にも感謝しかない。

パンプローナには郊外に大きなスーパーがあり、毎週土曜日に食材の買い出しに行っていた。大きなスーパーにはスペインらしく、生ハムコーナーとワインコーナーがあり、生ハムコーナーには豚の脚がずらっと吊るされていた。美味しい生ハムもワインもスーパーで買うことができた。残念だったのは乳製品で、ドイツと違ってスペインは乳製品があまり美味しくなかった。日本でもおなじみのヨーグルトブランドDANONEは、スペインのブランドなのに少し残念だった。

ZARAの発祥の地ということもあり、日本人の体形に合ったファストファッションブランドがたくさんある。

IKEAはなくて、赴任した当初から、土地と看板はあるが結局オープンしなかった。パンプローナのサグラダファミリアである。

最寄りのIKEAは、ビルバオかサラゴサにあり、共に2時間ほどの距離だが、大きな町なので観光ついでに行く楽しかった。

もう1つのサグラダファミリアはスタバであったが、ついに2024年秋にオープンしたとのことである。

スペイン人はカフェ(コーヒー)が好きでバルでもパン屋でも、コーヒーが安くおいしく飲めることもあり、スタバの進出が遅れたのではないだろうか。

中華料理、タイ料理、日本料理、インド料理など色々あるが、スペイン人の口に合わせて、辛くない、熱くない仕様になっているため若干物足りなさを感じることもあった。

レストランは、昼は14時から、夜は20時からといったスペイン時間なので子連れには辛いですが、バルは17時ごろから開いている。ただオープンに火が入っていないからとピンチョスの種類が少ないことがあるので注意が必要かもしれない(写真9)。

パンプローナでの生活で最大の難関は言語面と言えるだろう。パンプローナでは何をすることも基本的にはスペイン語が必要であった。幸いにも私は言語が好きであったため、帰任する頃にはそれなりのスペイン語を理解することができるようになったのは嬉しかった。



写真9 パンプローナでも有名なフォアグラ

3.3.2 旅行

パンプローナから、北に車で1時間のところにサンセバスチャンという街がある。

この街は、「美食の街」という名前で日本でも有名ではないだろうか。ミシュラン星付きレストランももちろんあるが、バルを巡るのがサンセバスチャンの楽しみ方だと思う(写真10)。

狭い路地に様々なバルが連なっており、各バルで1品と1杯のお酒を味わい、次のバルへ行く「バル巡り」をぜひ楽しんでほしい。またサンセバスチャンはバスクチーズケーキが有名であり、本場の「バスター」を食べることができる。

バルでは、並んで自分の番を待つのではなく、積極的に店員に話しかけに行くことがポイントである。

このサンセバスチャンの地域をフレンチバスクと呼び、国土はスペインながら、街の雰囲気はフランスであった。スペインとは違う食のおいしさがある。

パンプローナから2時間弱のビルバオにもよく

行った。ビルバオには空港があり国内外どこへ行くにも便利であった。

ビルバオの街には、グッゲンハイムという奇抜な見た目をした美術館や、世界最古の運搬橋として、世界遺産であるビスカヤ橋がある。このビスカヤ橋はNHKのピタゴラスイッチのコーナーで時々放映されており、それを見るたびに子どもが行ったことある場所だと喜んでいる（写真11）。

国外への旅行では、アイルランドとポルトガルへ行った。

アイルランドは8月に行ったが、真夏のスペインとは違い、もう既に秋のようでとても寒かった。名物であるアイリッシュユシチューは冷えた身体に染みて美味しかった。

またイギリスの歌手のエドシーランのPVで登場したゴールウェイに行くことができたのはとても良い体験だった。ドイツに住んでいる時もヒンターツァクスという山の撮影現場を見に行ったこともあった（写真12）。

ポルトガルに行ったのは、COVID-19の足音迫る1月の初旬だった。ポルトガルはスペインに比べると暖かく、過ごしやすかった。ユーラシア大陸の西の果てロカ岬まで行ったり、ナタというエッグタルトが有名で、何店舗も食べ比べたりした（写真13）。



写真11 ビルバオのビスカヤ橋



写真12 港町のゴールウェイ



写真10 サンセバスチアンのバル街

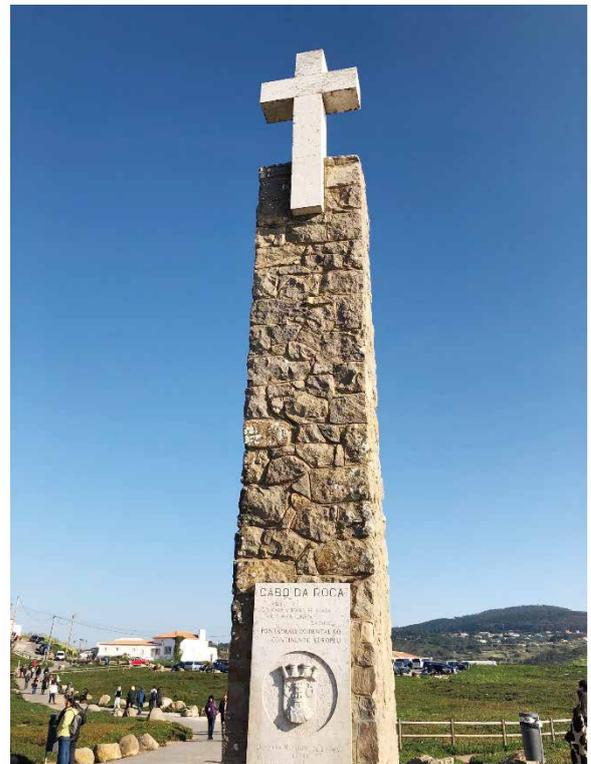


写真13 ポルトガルのロカ岬

3.3.3 COVID-19拡大期 日本に緊急帰国

2019年年末、パンプローナでは、子どもに気管支炎が流行り、パンプローナの病院が満床で入院できずに、他の街に入院しなくてはならないことも起きていた。

2020年のお正月休みにポルトガルに旅行に行ったが、帰りの飛行機の中は、ひどい咳をしている人がとても多かったことを覚えている。

謎の感染症が世界で流行り始めているというニュースが流れ始め、2020年1月30日、WHOの「緊急事態宣言」発令された。

日本では、2月1日、ダイヤモンドプリンセス号でのCOVID-19陽性者確認。スペインでは世界女性デーのデモ会場にいた人から患者が増えているということだった。そのうちにイタリアでパンデミックが起き、スペインでも老人ホームで多くの死者が出たというニュースとともにパンデミックが起き始めていると報道された。スーパーでの買い占めが始まり、トイレットペーパーやお米、パスタなどの棚は空だった(写真14)。



写真14 スーパーでの買い占め

子どもが通う幼稚園でも来週からは閉園になるかもしれないという噂通り、金曜日にいつものように友達と別れ、そのままロックダウンが始まってしまった。基本的に外出は禁止され、スーパーへの買い物も家族1人のみに限定され、年齢によってスーパーに行ける時間を分けられるなど、なかなかの徹底ぶりだった(写真15)。

そして、3月末、駐在者を日本に一時帰国させることに決まった。

もうその頃には、陸路も空路もかなり閉ざされていて、EUの国境は閉じられ、ハブ空港であるマドリード空港からはEU圏外のイギリス航路のみが残っていた。運がいいことに欧州から日本に帰るた



写真15 スマートフォンにも家になさいと表示される

めには、唯一イギリスからの便のみであったため、陸路でマドリードまで行き、イギリスからの便で帰国した。

下記の写真は、帰国日の羽田空港の到着案内である。ヒースローからの便は運行しているが、他は全てキャンセルである。(写真16)

到着時刻	航空会社	機体	到着時刻	航空会社	機体	到着時刻	航空会社	機体
4:55	香港	UO624	10:35	香港	UO624	13:06		
10:35	10:43	ロンドン(LHR) 韓航(OL)	12:10	パリ(CDG) 韓航(OL)	AF272	12:15	フランクフルト 東航(CO)	LH716
12:20	上海・瀋陽 華航(CN)	NH972	12:30	北京・瀋陽 華航(CN)	CA181	12:30	上海・紅橋 華航(CN)	FM815
12:30	北京・瀋陽 華航(CN)	MU815	12:50	北京・瀋陽 華航(CN)	NH964	13:00	北京・瀋陽 華航(CN)	JL20
13:00	北京・瀋陽 華航(CN)	MU8737	13:05	上海・瀋陽 華航(CN)	JL80	13:10	台北(松山) 華航(TSA)	CI220
13:10	台北(松山) 華航(TSA)	JL5042	13:20	台北(松山) 華航(TSA)	JL96	13:20	上海・紅橋 華航(CN)	MU537
13:30	上海・紅橋 華航(CN)	CI9220	13:35	ニューヨーク・ニューヨーク 日航	UA131	13:40	マニラ 日航	PR422
13:40	マニラ 日航	DL121	13:45	ミネアポリス ミネアポリス	DL7	13:55	香港	UO624
13:45	ミネアポリス ミネアポリス	DL7030	13:55	パリ(CDG) 韓航(OL)	AF272	13:55	サンフランシスコ 韓航(CO)	UA875
13:55	サンフランシスコ 韓航(CO)	UA875	14:00	ロサンゼルス 韓航(CO)	DL7			

写真16 欠航ばかりの飛行機

何とか身の回りのものだけを持って日本にたどり着いたが、その後もPCR検査、2週間の健康観察と隔離など、今まで体験したことのないことばかり続いた。

このような状態の中で1万キロ離れた場所でのリモートでの仕事が始まった。時差があったため深夜帯での会議もあったが、私が参加しなければならない会議は、できるだけ早い時間に設定するなどの配慮によって、乗り切ることができた。最大の難関は、距離が遠いことによるスペイン拠点のサーバーにつなぐ時間だった。1つのファイルを開くのに何分もの間待つ必要があった。

3.3.4 COVID-19収束期 日々の暮らし(単身赴任)

COVID-19も落ち着いてきて、スペインに戻ることになったが、まだこの先の状況も読めないで、単身での駐在にすることにした。

スペイン駐在員全員が単身の駐在になり、ちょっと男子合宿の雰囲気を持った駐在生活が始まった。

仕事中心、家は寝るために帰る感じであったが、幸いなことに、前述した提携社食の「ドン・ハビエル」にて、栄養面ではずいぶん助けられた。ただそんな「ドン・ハビエル」だが、COVID-19収束期には中国人オーナーが買い取ったり、値上げ要請があったりと2024年ぐらいから使用しなくなり、近くの別のレストランと新たな提携を結び使用していた。

また、男たちで繰り出せるレストランやバルも多く、食事ですトレスを感じることはなかった。

スペイン北部は海が近いので、ミュンヘンと違って海鮮が豊富だった。タコを食べる習慣もあり、イカやタコが特に美味しかった。またパンプローナは山に囲まれているので、肉系料理も豊富で、特に「チュレトン」という熟成肉のステーキは絶品であった（写真17）。



写真17 チュレトン

とは言え、外食ばかりではなく、時々自炊にチャレンジして、名古屋風手羽先や回鍋肉を作った。

ただ自炊もあまり長くは続かず、駐在最後のほうには宅配サービスをよく利用した。オンラインで注文のため、気軽に様々な飲食店を楽しめ、非常にお勧めするが、時々家の場所が分からないとスペイン語で電話がかかってくるので、その点では少し利用難

易度は高くなる。

日本に居る妻子とは、毎週末フェイスタイムで話をしたり、子どもとオンラインゲームを楽しんだりした。技術の進歩には感謝である。

COVID-19が過去の物となった2023年度以降は、私にとって充実した駐在生活となった。海外渡航が自由となったため、日本からの出張者がスペインにも訪れるようになった。駐在している日本人以外に会えるのはやはり嬉しいものであった。出張者が来ると外食の機会も増え、新しいレストランにもチャレンジをするようになった。

パンプローナには、いわゆる「なんちゃって日本食」のレストランしかない。私自身はスペイン料理も好きで、基本的になんでも食べられるため、日本食がなくても困ってはいなかったが、たまに食べたくなることはあった。

長期出張者が来ていた2024年初頭、2軒の新しい日本食レストランができたので挑戦してみた。

1軒目は「武賀ラーメン」という名のラーメン屋だった。店内は日本語の看板が壁にかかっており、またアニメのフィギュアがたくさん置いてあったり、怪しさ満点である。まずは餃子を食べてみたところ、普通に美味しかった。ただスペインのスーパーにも冷凍餃子は売っており、それも美味しいので餃子だけでは判断できなかった。次にいよいよラーメンを食した。見た目は良かった。ただ良かったのは見た目だけだった。ラーメン以外は美味しいので、パンプローナ行った際には行ってみたい。

2軒目は火鍋レストランだった。店員は中国人であり、私たちが最初訪れた際に、システムを流暢な中国語で説明してくれた。彼らもパンプローナに日本人がいるとは思わなかったであろう。とりあえず流暢な中国語に対しては、「Vale（スペイン語でOKの意）」と答えておいた。

この火鍋レストランが非常に当たりだった。あまりにも気に入ったので毎週のように通った。このレストランの良いところは、海外で入手難易度の高い「薄切り肉」があることだ。海外のスーパーでは薄く切られた肉は売っていないのである。

そしてタレは自分で作るシステムなのだが、ゴマペーストがあり、火鍋のスープでとけばゴマダレになる。また持ち込みも可だったため、ポン酢や薬味などを、毎回持ち込んでいた。私の帰任直前には、日本から持参したすき焼きのタレを持ち込み、すき焼きをやらせてもらった。ここはもう日本食レストランと呼んで過言ではない場所になった。今後はパンプローナにも日本食レストランはあるというべきかもしれない（写真18）。



写真18 火鍋

3.3.5 帰任に向けて

長かった駐在生活も後任が決まり、終わりが見えてきた。单身生活になり旅行や観光をしなくなっていたが、やり残したことがないようにしようと決意した。

まずは牛追い祭りの闘牛を生で見ることにした。今まで牛追い祭り期間中のお祭り騒ぎの雰囲気は味わっていたが、闘牛は観ていなかった。パンプローナの闘牛場は世界的にも有名であり、収容人数は世界TOP5に入る大きさである（写真19）。



写真19 パンプローナの闘牛場

実際に牛を刺し殺してしまう闘牛を実施できる街は減ってきているが、パンプローナの闘牛場ではいまだに実施されている。しかし、時代の流れと共に消えていくのではないだろうか。

次にピカソの絵にあるゲルニカ、壁画のアルタミラなど妻子と行くことができなかった街を巡った。

そして、最後の旅はスペインの西にあるサンティアゴデコンポステーラに行こうと決めた。

スペインにはカミーノと呼ばれる巡礼路（お遍路のようなもの）があり、その最終地点がサンティアゴデコンポステーラにある大聖堂なのである。

パンプローナも巡礼路の通過点であり、長い道のりを歩く巡礼者達を見かけることがあった。パンプローナからサンティアゴデコンポステーラまでは約800km、巡礼者達は1カ月以上かけて歩いていく。私には到底かなわない話なので、車にて簡易巡礼させていただくことにした。

サンティアゴデコンポステーラ大聖堂は、私が今まで各地で見てきた教会の中でも一、二を争う荘厳さがあり、訪れただけでも敬虔な気分になった（写真20）。



写真20 コンポステーラ大聖堂

ところで、私が好きなスペイン料理の一つに「Pimientos de Padron」というものがある。この料理はPadron（パドロン）という街で取れたPimientos（スペインしし唐）をオリーブオイルで揚げ焼きしたものである。このパドロンという街がサンティアゴデコンポステーラから南に行ったところにあり、そこでは、8月の第1土曜日にPimientos de Padron祭りが開催される。このお祭りに訪れることをスペイン生活の締めとした。

このお祭りはとても小さな村で開催されており、周りは地元民ばかりで、私たち以外に観光客はいないようであった。私はそのお祭りに送別品で頂いた



写真21 Pimientos de Padron祭り



写真22 Pimientos de Padrón

Pimientos de Padron Tシャツを着て浮かれた様子で参加したためか、地方紙のガリシア新聞に写真が掲載された事はスペイン生活の締めくくりとしては最高の思い出である (写真21, 22, 23).

4. おわりに

今回、この駐在記をまとめることが、私の6年半の駐在生活を改めて振り返るよい機会となった。

まず、COVID-19という、どのような変化が起きるのかも予想できない事態に見舞われながら、大きなトラブルなく駐在業務に従事できたのは、共に欧州での駐在生活を送った全ての方々のおかげである。

ミュンヘンでもパンプローナでも、上司やスタッフに恵まれ、新しい仕事の形を模索する中でも、的確な判断を得ることができ、また公私ともに非常に手厚いサポートを得られ、どれだけ安心して仕事ができただかを再確認することができた。

私の駐在生活を支えてくださった全ての方々に、この場をお借りして心よりのお礼申し上げたい。

そして、また共に仕事ができる日があることを願う。

またCOVID-19以前は、家族帯同でドイツ、スペインで生活していたが、COVID-19以降は、単身での駐在となった。当時、子どもはまだ未就学児の年齢であり、私が一時帰国からスペインに戻るたびに泣いてしまい、寂しい思いをさせた。



写真23 送別品で頂いたTシャツ

別れ際に、私の手をギュッと握ってくる子どもの手を握り返すとき、我慢してくれていることをひし

ひしと感じ、お互いに頑張ろうと心の中で誓った。

また、妻にも異国での子育てや生活の多くを委ねてしまい、単身赴任時には、一人での子育て環境になってしまったことなど、妻子の理解がなければ駐在生活を全うできなかったと思うと、感謝してもしきれない。

帰任した今、少しずつでも一緒に過ごせなかった日々を取り返したいと思う。

そして、駐在経験を家族の思い出として、いつかミュンヘンやパンプローナを3人で訪れてみたいと願い、これを私の人生の日標の一つとしたい。

著者



飯田 亮

2013年入社。営業本部 中部ビジネスユニット 第一営業部所属。
トヨタ自動車向け営業に従事。